

# 柏木義円『上毛教界月報』論文註解稿（二）

市川浩史

## ◎本文、並びに註、解（承前）

○第八号（明治三二年六月一日） 発行人兼印刷人 大久保真次郎

### 幸福の生涯

天地は神の真理と美妙との充滿する大教室なり。人は万有中尤も靈妙高貴なる靈魂を稟けて此間に在り全世界を以ても値す可らざる永遠不朽の品性は神が將に人が榮光の天に入るに先ち与へんとして待ち玉ふ所の卒業証書なり。人は神の教育を受けて能く此榮光に入るを得可し。宗教は人間が享受する最高最良の教育なり。即ち人が直接に神より受くる教育なり。吾人希くば神の教育を受けて此世を終へん。光榮何物か之に加へん。

星学者ヘーシエル氏<sup>1</sup>青年立志の誓に曰く『我此世を去る時は我の之に蒞みたる時に優りて更に善きものと成して逝かん』と我亦希くば神の佑助に由り聊かにても我成育せし家庭我住せし家郷我榮へなる国家を尚ほ一層善美に為すに貢献することあるを得ば幸ひ何物か之に加へん。希くば日々善を為すの機を逸するなけん。親切を為すの折を失ふなけん、愛に根ざして善事を為し『受くるよりは与るは幸なり』との聖言を味ふを得ば何の歡樂か之に過ぎん。

吾人が希ふ所の幸福の生涯は唯此のみ

信仰の識見は世に一頭地を抜く

靈の眼を開らき宗教の高所より社会の形勢を觀察せば政治界なり、教

育界なり、將た社会の風俗慣習上なり。我儕の見地は常に世に先ちて一頭地を抜かん。然れども一旦宗教の他所を下りて俗と相迫逐するに至らば我儕は万事世より後れ唯徒らに世の浮華虚誇權変巧機に煙に捲かれて反て自らを卑くするの外なかる可し。何の違ありてか改革を以て自ら任ずるの意気あらんや。近年も基督教界の社会改革の意気銷沈したるの觀あるは歎ず可き事と謂ざるを得ず。苟も聖經に潜めて理想を明にせば社会の前途改革を要すること山の如し。吾人は宗教の高所に立て、万般の觀察を為し銳意社会の改革に任せざる可らず。

青年会の一飛躍を望む

青年は社会改革の急先鋒なり。改革は是非青年の手を待たざる可らず。近来我上毛の各教会に於て陸続青年会の起りしは慶す可き現象と謂ざるを得ず。吾人は敢て望む、百尺竿頭進一步更に連合して上毛青年会を起し社会改革の警鐘を鳴らされんことを吾人は追々之に関して卑見を披陳する所ある可し。

雙眼を開け

生存競争は是れ世界の大勢にして決を武力に取るは尚ほ十九世紀国交際の実況なり。然れども水の地下に浸潤するが如く寂然声なくして次第に世界を掩はんとするものは神の王国の潜勢力に非ずや。武力競争の波濤何如に海の面に洶湧するも平和は大洋の底流にして海面の波濤も遂に其大勢に願はざるを得ざるなり。世界の實勢を達觀し、百々の国是を定むるものは単に十百の朦朧となり、百万の豺豕となりて人の耳目を聳動する生存競争の形勢を察するに止まらず尚ほ深く寂然声

なくして着々世界の大勢を推移せしめつゝある神の国の勢力を看取するの眼を具せざる可らず。単に生存競争の形勢を計算して既に世界の大勢に通ぜしと為すものは未だ片眼の觀察たるを免れざるなり。片眼を以て国家の方針を定めんとす。国家百年の長計を失するに庶幾し我國に在りて帝國主義を唱るものは果して片眼の觀察が抑雙眼の觀察か彼の徒らに海陸軍備の盛を以て国光揚がりりと誇耀するものは刀を按じて疾視するの外他能なき武士が明治の世に於て逼迫せし如き運命に将来の國家を陥れんとするものなり。彼のトルストイ伯が『人々が軍隊操練と稱する野蛮的訓練『即ち兵役』に其身を屈從するを止むるに至らざれば軍備減縮決して実行す可らざるなり。人々が人間の眞価を認むるに至り此に始て斯る訓練に屈從するを止むるに至る可し』と絶叫せし如きは矯激の言たるを免れずと雖ども亦味ふ可きものなきに非るなり。国光の発揚は世界の文明に大寄附を為すに在り。アゼンヌとスバルタ<sup>3</sup>何れか国光永く世界に揚りしスバルタの蛮の誇耀は世界の文明場裡に出で、は殆ど零なり。日清戦争虚誇の幻華に煙に捲かれて國是を誤るなくんば幸なり。唯學術文學宗教道德工芸の進歩平和の競争に優勝を占むるの用意ある國民こそ永遠の勝利者なれ。

#### 日本社会の最大欠乏

元良博士<sup>4</sup>は『中等社会に於て現今の日本の困難と云ふものは貧富の懸隔と云ふ様な事ではなくして一の困難がある。これは即ち人の思想を統一してゆく所の標準即ち主義と云ふ者が定つて居らぬ。即ち倫理上の懷疑、疑惑、或は『アナーキー』無政』と云ふて宜しいか……日本全国に亘つて之を統一し居る主義と云ふものはない。固より何れの國に於ても多少さう云ふ事はあるが……大体の精神上を統一してゆく所のものがなければ銘々の思想が皆標準を異にして来る故にどうしても中等社会の社会的活動と云ふものが円滑にゆかないのである。故に我邦の中等社会に於ける困難に就て今日社会学上研究す可きは貧富と云ふ様な事よりは寧ろ社会的倫理の研究と云ふ事を社会が要求して居るのではなからうかと考へるのであります』(社会第一号)

然り々々日本人心を統一する風教を立つる程今日に急務なるはなし。然らば如何なる風教に由りてか日本の人心を統一せん。日本丈の思想を統一するも世界の大勢に乖戾せしものは開國と共に破壊されて今の様なる『アナーキー』に陥りしに非ずや。且つ世界は益々密接し来り到底世界を統一する倫理思想に非れば世界的活動円滑にゆかざるのみかに日本一国の人心すら統一する能はざるなり。日本人心を統一するの勢力ある世界的宗教は何ぞ。吾人基督教徒、奮て自任せざる可らず。

#### 徳育問題

啻に社会が倫理思想の統一を欠くのみならず。社会中立の抵柱たる可き教育に於て尚ほ徳育上に定見なく本領なきは実に奇怪千万にして亦國家の深憂に非ずや。抑普通教育の要は智情意心身の諸能力を均斉に発達せしむるに在りと雖ども特に重要な此諸能力を統率す可き中心力を作るに在り。即ち其生産を一貫する人としての主義本領を確立せしむるに在り。これなきの教育は龍を囚て眼睛を点せざるもの真成の教育に非るなり。孔子曰く其安する所を察せば人焉ぞ瘦さんと。カールエル<sup>5</sup>曰く國民に於ても個人に於ても予が先づ第一に問はんと欲する所のは其宗教なり。既に其宗教を知らば其如何なる人物なるか、其如何なる行動に出るか之を察する難きに非ずとカールエルの所謂宗教とは所信の意味にして諸能力を統率する中心力の謂に非ずや。其信する所如何。其安する所如何、其人物の淑慝高卑、於是か定る徳育の要は区々たる行為の定規や徳行の条目を機械的に注入するの謂に非るなり。唯正大尊嚴なる道を發揮して其信する所正しく其安する所深く行住坐臥之に由り死生榮辱辱ふ可らざるの大節を立てしむる、これ教育最高の理想なるなり。然るに現今我邦の教育界は如何。此教育の本領未だ確立せざるに非ずや。往年教育勅語の始て出るや、堂々たる教育家相和して曰く、由来教育問題紛々多岐適従する所なきを憂とせり。然るに教育勅語一度出で、太陽照らして暗黒去りしが如く徳育問題此に一定せりと吾人以為らく教育勅語に宣示し玉ひし所は

何人にも依存なき普通教育実践の倫理なり。由来德育問題として紛々の論議ありしものに少しも触接する所非るなり。故に德育上の根本問題は未だ解決せられずして尚ほ依然として存するなり。然るに教育勅語一たび出で、德育問題此に一定し四海波静かなりと相慶す。何ぞ其れ軽躁なる何そ其れ浅慮なる且つ德育問題を決するものは政治上の『アウソリチー』（権証）に非るなり。若し科学上の問題を決するに勅語を以てせば如何。德育上の問題は教育家自ら自家の識見を以て之を解決す可きに非ずや。然るに德育上の問題を決するに政治上の『アウソリチー』に頼らんとす。是れ教育家の不見識を表明する者に非ずや。是れ反て詔諛に非ずや。吾人は当時此趣旨を以て同志社文学紙上に論じ、教育家が勅語の『アウソリチー』に由りて己れに異なる倫理思想を排せんとするの陋を難じたることありき。然るに此際、德育問題既に決定せりと手を額に加へて安心して相慶したる我邦の教育界も今や亦漸く德育問題未だ解決せられざるを示さんとするに至りたるは兎に角教育界覚醒の兆として見る可きか。吾人は元來教育勅語を以て科学上の問題を解決せんと為れど一般寧ろ詔諛にして忠に非ずと思惟するものなり。斯る謬想の我教育界に存在する限りは我教育界は真成に德育問題を決する見識あるを得ずと見て大過なかる可し。道義上の『アウソリチー』は果して何くに在るか能く之を決するの識あるものは亦德育問題を決するの識ある可し。吾人は教育上の根本問題に至て我教育界の現状に慚焉たらざるを得ざるなり。

註

- (1) Sir Frederick William Henschel (一七三八〜一八二二) は、ドイツ生まれのイギリスの天文学者。  
 (2) 出典不詳。  
 (3) アジェンヌ、スバルタは古代ローマの都市国家のひとつで、強烈な軍事教育で知られた。「アジェンヌ」については不詳。  
 (4) 元良勇次郎（一八五八〜一九二二）は初期の心理学者。

- (5) Tomas Carlyle (一七九五〜一八八一) は英国の政治家。  
 (6) 柏木「勅語と基督教（井上博士の意見を評す）」（『同志社文学』六〇号、一八九二）

解

柏木には「国家」の問題が重くのしかかっていた。彼はその問題を信仰、宗教にとつても重要なこととして認識していた。時に一八九〇（明治二三）年に発布された教育勅語の重さがじりじりと身に迫っていたと思われるこの時期、柏木は品性そして徳のある国家を構想すべく、この論考を執筆した。文字通りの国家の根本問題として、教育とありわけ德育の問題を信仰、宗教の側から論じた。

#### ○第九号（明治三二年七月一日） 発行人兼印刷人 大久保真次郎

敬度マヤの念の欠乏

社会の腐敗を攻撃し人の非を指摘するもの多し。自ら省みて其心志の卑く其言行の公正なる能はざるを識て自ら傷むの誠意あるものは少なきなり。其心志の卑しきを傷み其言行の公正なる能はざるを憂るもの尚ほ在り。神を畏敬して惶懼己れの罪を哀しむものに至りては更に甚だ少なきなり。神を信ずると謂ふも此敬度マヤの誠意なくんば是れ己れの思想の構造したる無形の偶像を担ぐのみ。否な神の名を冒して己れの我意を張るのみ。今日の教会の神を信ずるの信、果して如何。吾人は自ら省みて真成なる罪の觀念乏しく、神の名を冒して我見を張るの過に陥るなきかを恐る。希くは我に我罪人たるを識らしめ玉へ。神を信ずると称して自ら欺くことなからしめ玉へ。

股膺マヤす可き箴言（箴言三十の七以下）

われ二つの事をなんぢに求めたり。我が死ざる先に之を賜へ。即ち虚偽と謊言とを我より離れしめ我をして貧ならしめず、又富ましめず唯なくてはならぬ糧を与へ玉へ。そは我あきて神を知らずと云ひエホバは

誰なりやといはんことを恐れ、又貧しくして窃盜をなし我が神の名を汚さんことを恐るればなり。

#### 幸運なる生涯

敢て甚しく身を勞したりと謂ふに非るなり。又痛く心を勞したりと謂ふにも非ざるなり。別に人に勝れたる腕前あるにも非ず。又人に挺で、善事を行へしと謂ふにもあらず。而して家道日に興り物に乏しきことなく一家を支へて余りあり。以て歛娯を取る可く以て親戚朋友の急を濟ふを得可し。家人皆健康子女亦庶幾多何れも其生ひたち申分なし。此の如きの家は日々神に感謝讚美して之に敬事するを忘る可らず。又人の為に善事を為すの心掛なかる可らず。若し然らずして此多幸に居て神に謝するの念なくんば最も禍なるものなり。今日の幸運は反て他日禍の源となり、悲痛後悔するの時あるべし。

#### 薄命なる生涯

敢て勉めざるに非らざるなり。又嘗て曲りし道を歩まず心を勞し身を勞し孜々砧々として勤むるも事々皆齟齬して家道日に衰へ心に正直を期するも金なければ往々人に信を失するを免れず。加之泣面に蜂の諺の如く、或は家内に意外の変事起り、或は病魔の纏ひ付く所となり一家実に慘憺たるものあり。慈愛の天父照臨坐すか。何ぞ其れ彼に多幸にして此れに薄命なる然りと雖も永遠の生命に比すれば是れ短日月間の出来事のみ『いたずらに、うしとないひそ、あめつちの、神の御子すら、世に住みにき』<sup>①</sup>困窮慘憺たるも豈に独り我のみならんや。僕は主より勝らず、弟子は師より勝らず、神の子基督すら我先て吾人の為めに所謂薄命の生涯を送り玉へしに非ずや。『凡ての事は神の旨に依りて召れたる、神を愛する者の為に悉く働きて益を為すを我儕は知れり』<sup>②</sup>是れ使徒保羅の深き実験なり。此の薄命の中に在りて神の深き聖旨を悟りて感泣に堪へず。火の如き悲痛の間より衷心より讚美の声を掲ぐ。神の栄光の耀く此れより著きはなく、世の薄命者の慰めとなり、力となるもの亦此れより大なるはなし。『神は我儕が諸般の患難の中に我儕を慰め玉ふ、是れ我儕をして神の我儕を慰め玉ふ。安慰を

以て又もろくの患難みに居る者を慰むることを得しめん為なり。それは基督の苦みわれらにある如く俄儕の安慰も基督に由て多くあればなり』<sup>③</sup>(哥林多後書一の一四五)とあるが如く薄命者は神の栄光を顯はす為に高貴なる天職を負ハせられたるものなり。薄命に居て天を怨み人を咎むるは普通人情の免れざる所なりと雖ども是れ薄命をして愈々薄命たらしむる所以又天と人とに同情を失ふ所以なり。人の同情を失ふ尚ほ忍ぶ可し。若し天の同情を失はゞ不幸此れより甚しきはなけん。

#### 究意の決心

失敗又失敗不運又不運家道日に下り坂に向はゞ人の此間に処するの道如何。人は斯る際には心乱れ人道をも踏み外し信仰を失ひ品格を毀つるものなり。此際回復の道は唯祈りて神の正直に協はんことを求め聖書の誠を我足の灯となし真面目に嚴密に正道を歩むに在り。而して徒らに思ひ煩ふこと此の如く行ふて餓死する尚ほ悔みざるに在り。國家の為に戦死し主義の為に迫害に斃る赫々の名ありて人皆之を榮とす。然れども薄命の人尋常家事の間に道を守りて餓死す榮に非ずして寧ろ辱なり。然れども神の栄光の顯はるゝ時には其栄光亦共に輝く可し。究意の決心は道を守りて餓死して悔みざるに在り。不運窮りて再び幸運開くるも零落窮りて愈々零落するも神に由りて正道を歩まば遺憾なし。人の知らざる平和と希望と安慰と喜樂とあり、到底道を知らずして富貴なるもの、知り得る所に非ず。『爾曹先づ神の国と其義とを求めよ』<sup>④</sup>『天空の鳥を見よ、稼ぐことなく穡ることをせず倉に蓄ふることなし。然るに爾曹の天の父は之を養い給へり。爾曹之よりも大に勝ぐるゝものならずや』<sup>⑤</sup>『野の百合花は如何にして長つかを思へ。勞めず紡がざるなり、われ爾曹に告げん、ソロモン<sup>⑥</sup>の榮華の極みの時だにも其装いのこの花の一つに及かざりき。神は今日野に在て明日炉に投げ入れらるゝ草をも如此よそはせ給へば況して爾曹をや。嗚呼信仰うすきものよ』<sup>⑦</sup>と神に任せて其分を尽くし否運と戦ふて至る所まで至り餓死して而して後ち止むべし。是れ禍を転じて福となす唯一無二の正道なり。然りと雖ども真道を踏んで勉むるものをして此不幸に移ら

しむるは其社会に責なしとせざるなり。其親戚知人に責なしとせざるなり。

## 註

(1) 讚美歌のようであるが、不詳。柏木が依用したと思われる『新撰讚美歌』（著者兼発行者植村正久、奥野昌綱、松山高吉、印刷者須原高義、一八七〇・ただし右波文庫『新撰讚美歌』同、二〇一七に依った。）には見えない。なおこの書については、第十号註5を参照されたい。

- (2) 新約聖書「ローマの信徒への手紙」八章二八節
- (3) 新約聖書「コリントの信徒への手紙二」一章四〜五節
- (4) 新約聖書「マタイによる福音書」六章三三節
- (5) 新約聖書「マタイによる福音書」六章二六節
- (6) 新約聖書「マタイによる福音書」六章二八〜三〇節

## 解

柏木はこの論において、単に信仰を勧めるという趣旨ではなく、「敬虔の誠意」という語を用いて、キリストを信じる者の倫理性豊かな信仰のありかたを問題にしようとしている。最後の「究意の決心」中の「神に由りて零落するも正道を歩まば遺憾なし」がその謂いそのものである。なお、本文中「敬虔」の語は二度用いられているが、二度とも誤植されたままである。

○第十号（明治三二年八月一五日） 発行人兼印刷人 大久保真次郎

英国の輿論、安息日を重す

近頃英国倫敦市にて勢力ある二大新聞なる『デーリーテレグラフ』と『デーリーメール』とが日曜日刊行の新聞を発売せるや痛く輿論の反抗に逢ひ其結果遂に二新聞間其相繼で日曜刊行を廢するに至りたるは

実に注目す可き一現象と謂ざる可らず。英国は当今世界第一富強の国なり。其国民有形無形の進歩到底英国に肩を比す可き国あることなし。マツコレイ卿嘗て曰く英国の隆昌なるは国民安息日を守るの風に負ふ所多しと十九世紀の大偉人故のグラッドストーン氏が其英国大宰相の劇職に在る際にも日曜日には必ず会堂の礼拝に列なりしが如き這回英国の輿論が二新聞の日曜刊行に反対して英国社会の為に安息日嚴守の風を擁護せしが如きは心を宗教道德の事に用るものは勿論、苟も思を社会の風教に致すものは決して軽々に看過す可らざる現象と謂ざる可らず。世界中尤も繁劇を極め倫敦市中を歩するものは足地に着かざるが如しと迄言はるゝ多忙なる英国社会に於て鉄道郵便馬車に至る迄日曜日は必ず休むの習なるとは果して何等の必要ありて然るか。実着冷頭事物の軽重を秤る英国人民豈深き理由なくして之を為すものならんや。到る処に神を礼拝するの会堂立てられ其郷民の多数が楽しく会堂に集り神を礼拝し其教を聴くに至らば果然其郷の風俗一変す可きなり。一家老幼相携へ喜で神の礼拝に集ふに至らば其家庭平和ならざるを欲するも豈得んや。一家の為め一郷の為め一國の為め此美風を作くり立つるものは抑誰れの責任ぞや。

先きに撰ばれたる主に在る兄弟諸君請ふ我儕をして日曜日は美事に惜むことなく之を主に献げ其老父母を誘ひ、其妻を伴ひ、其子女を携へ、其僕婢を導き多くの人々喜ばしく相集ひて神を礼拝するの席に会するの美風を起さしめよ。一日平生の働を棄て、心を閑ならしめ、或は静かに黙想して神に祈り、聖書を玩味して聖旨を学び、或は伝道の事、日曜学校の事、教会の事、何呉れとなく之の用を為すを以て樂みと為し、或は同信の兄弟を訪ふて神恩を物語り、或は病めるもの、難めるものを訪ふて之を慰め、或は求道者を求めて其興信の助を与るが如き事を特に此日為すの美風を起さしめよ。

我儕は七日に一日此の如くして日を送くるの暇まなき程生活に切迫せるものなるや否や。抑神に忠なるの心掛薄きに由るか。將た又未だ信仰の真味を味はざるに由るか。基督教の振ふと振はざるとは慥かに善

く此日の守らるゝと否とにあるなり。

石の心を除き肉の心を与へ玉へ

我れ新しき心を次第に賜へ、新しき靈魂を汝等の衷に賦づけ汝等の肉より石の心を除きて肉の心を汝等に与へ。吾靈を汝等の衷に置き、汝等をして我法則に歩ましめ吾律を守りて之を行はしむ可し

(以西結<sup>1</sup>三十六の二十六二十七)

我に常に新しき心を与へ玉へ。我れは能く我手を揺かし、我足を動かすを得るも我心を奈何ともすること能はざるなり。我は自ら好まざるも反て人を侮り人に不親切なる心を懐くも我は衷心より謙卑ること能はざるなり。我は眞実なる愛に乏しく我心の沙の如く湿ひなきを感じずるなり。我は嘗て爾を信ずるの信なく爾に事ふるの心なかりしなり。我は我が心の到底我意の如くなる能はざるを知り、我の遂に爾を信じ爾に事るに至らんとは爾を信ずる其瞬時前迄は心に全く予期せざりし所なりしなり。爾は爾の靈の力に由りて我心を更変し全然我心の向きを一転し突如青天白日の境に出でしめ積年我心を染め成したる罪の煩ひをも洗ひ去られたるが如く忘れ去らしめ薄志弱行最も意志の力に欠けたる我れをして全く己れの私を棄て畏くも主なる爾に事へて生涯を送らんとと思をして我心の主とならしめ玉ふたり。我は唯爾の大能を讃嘆するのみ。ただ爾の恩恵に感泣するのみ。我れは生涯未だ嘗て此の如き喜樂を感じたることなかりしなり。噫我に新しき心を与へ玉へ。これ我儕人類の願望なり。我儕の心は石の如く玩硬に爾の独子が我儕の罪の爲めに死し玉へしと聞くも我儕の心は冷かにして之に感ずる能はざるなり。『それ義人の爲に死ぬるもの殆んど稀なり。仁君の爲めには死ぬること厭はざるものもやあらん、されどキリストは我儕の尚ほ罪人たる時我儕の爲に死に玉へり』と保羅が叫ぶも我儕の心は甚だ之が爲に動かざるなり。『主は我儕の爲に生命を捐て玉へり。是に由りて愛といふ事を知りたり。我儕亦兄弟の爲に生命を捐つ可し』との約翰の心は我儕の心には他人のもの、如く思はるゝなり。噫此愛なく生命なき石の心を除き恩に感じ義に感じ愛ある生命ある温かなる

肉の心を与へ玉へ。希くば爾の靈をして我心の衷に居らしめ我儕をして常に爾の愛の則を喜んで之を守らしめ玉へ。

#### 総進撃

秋高くして馬肥ゆとはこれ脾肉を撫して戦思勃々たる壯士の言なり。九月は是れ上毛の野に天軍の金鼓鳴り響き大に十字の軍旗の動き初むる秋に非ずや。内地雑居実施の声は端なく著しく我國民開国の思想を明発し世界的の思想は潮の如くに芙蓉峰目懸て押し来り、実に天国拡張の好時期となりしに非ずや。総進撃なるかな、総進撃なるかな。億ひ起す昔し関ヶ原の役一勇士家康の本営に謁す。家康問て曰く敵軍幾何ぞ。答て曰く三四万に過ぎず。家康怪で曰く候騎の報するもの皆十六七万を以て答ふ、爾独り三四万と為す何ぞや。曰く予は唯蘭士を数ふるのみと此時西軍の數、実に東軍に倍す。而して戦ふ志あるもの反て三四万に過ぎず。是れ三成の家康に擒にせらたる所以なり。今や我上毛の各教会天国の軍籍に在るもの或は百、或は二百、然れども魔軍をして我軍中真に主の陣頭に立て戦ふの心掛あるものを数へしめば其數果して幾何を得可しか、起てよ、我党の兄弟諸君若し我儕にして皆主の爲に必ず何事か為さんと決心せしめば特に安息日には是非主の爲に何事か為さざる可らずと決心せしめば其れこそ教勢俄然として一変す可きなり。大なる事を空想して袖手何も為さざるよりは如何なる小事にても主の爲に之を執行するは是れ真に大なることなり。年老ひたりと謂ふ勿れ。年少なりと謂ふ勿れ。婦女子なりと謂ふ勿れ。多忙なりと謂ふ勿れ。無能なりと謂ふ勿れ。

すくひのめぐみ つぐるわれは  
たのしみあふれ うたとなりぬ  
ほろびをいでし このよろこび  
あまねくひとに えさせまほし  
たいにくすしき 主のめぐみは  
世にみちわたり あるかひなき  
われをもすれず めしたまへば

たれかもるべき 主のすくい<sup>5)</sup>  
 嗚呼世に充ち渡たる主の御恩寵は世に有り。甲斐もなき此の我をも棄て玉ふことなく過分の光榮に召し玉ふたり。嗚呼誰か主の御救ひに洩る可きものぞ予は。此二百二十七番の歌を三唱して感激の至に堪へず、伝道の念転た勃々たるを覚るなり。

註

- (1) 旧約聖書の「エゼキエル書」のこと。
- (2) 新約聖書「ローマの信徒への手紙」五章七、八節
- (3) 新約聖書「ヨハネの手紙一」三章一六節
- (4) ヨハネのこと。
- (5) 植村正久、奥野昌綱、松山高吉篇『新撰讚美歌』（発行者須原徳義、一八九〇年、岩波文庫『新撰讚美歌』二〇一七、に依つた）の二二七番の三、四番の歌詞。なお、四番の「たいにくすしき」の「たいに」は「たへに（妙に）」の柏木の越後訛か。

○第十一号（明治三十二年九月十五日）

発行人兼印刷人 大久保真次郎

社会改革に於ける基督教会の地位

社会を開導し、個人を陶成するに重要な機関、四あり。曰く政治、曰く教育、曰く宗教、曰く家庭是れなり。プラトーンが国家真正の目的は国家を組織する個人を教育して有徳なる生活を為さしむるに在りと云ふ。国家其物が有徳なるに至て初て凡ての個人をして有徳ならしむるを得可しと云ひしが如き、孟子が熱心に王道を唱道したるが如き猶太の預言者がメシアの統治を大早の雲雷の如く渴望せしが如き、皆是れ政治を以て正道を社会に実現せしむるに有力なる機関と為せしものに非ずや。然れども基督を磔し、ソクラテスを殺したるものは政治なり。書を焚き儒を坑にせしもの幕末開国の志士を窘追したるもの亦政

治なり。政治が如何に社会の進歩を咀嚼し其国民を腐敗せしむるかは既鑒昭々として近く支那に在り。古来聖賢君子を斃して以て正道を圧碎せし時に先づの思想を迫害して社会の進歩を阻碍せし尤も有力なる妨害物は正しく政治其物なりしなり。撰挙場裡に敵に打勝つ為め或は反対党の勢力を滅殺する為めには無根の記事を掲げて敵を中傷す可く、罵詈譏謗も為す可く、詐偽の猜策も算す可く、甚しきは殴打もす可く、瓦石も投す可く、賄賂も為す可く、或は公職を算して地方の利害を犠牲にして私党の拡張を計るや、或は国家の公問題に関する賛否の権を売買するや、公議の府たる可き中央と地方の議會が此の如き醜態なるのみならず、政府の各部分亦賄賂を取らざるを得ざる境遇否な毅然として賄賂を斥くるは難く、嫣然として之を受くるは易き境遇なりとせば此の如きの政治機関は必ず社会を腐敗せしめざるを得ず。我国の政治機関は如何。吾人は本紙に於て之を論議するの自由を有せず。果して恃で以て社会を開導し個人を陶成することを得可きや否や。或は反て社会を腐敗せしむるの不良の感化力たらざるや如何。教育は如何。其思想は頑陋にして排他的なり。時に忠君愛国の名を振り翳して、或は思想の自由、或は良心の自由を圧迫することあり。其器機的にして物質的なる理想なく、確信なく、生気なく、有為の青年をして木曾山中棟梁の巨材たらしめずして滔々たる庭の作り木となりらしめんとす。各地に於ける教科書審査会の醜態<sup>2)</sup>は以て教育界道德の程度を示して余りありと謂ふ可し。此の如きの教育は寧ろ其大処に於て其深き処に於て社会の進歩、個人の發達を害するの憂なしとせざるなり。

家庭は如何、万朝か都下に蕃妾実例を探りて千を得るに難きを覚へざりしとの事丈けにても我国の家庭の如何を概察す可きなり。大概如電<sup>3)</sup>なる人は日本紙上に於て基督教の一夫一婦主義を以て日本の国体と衝突し乱臣賊子に陥るものと論じたり。我国の家庭は未だ子女の教育に適するほど清潔なるもの少なきなり。不貞潔の事飲酒喫煙の悪習は実に家庭が実例を以て其子女に教示する所のもの多きなり。（未完）

## 註

- (1) 一八三九年の蜜社の獄をさすと思われる。  
 (2) 一九〇二(明治三五)年、学校の教科書を採用する府県と教科書制作会社とのあいだに起こった疑獄事件をさしている。会社は採用担当者に賄賂を贈り、採用を迫った。この事件を契機にして、教科書は検定制とされた。  
 (3) 大槻如電(一八四五〜一九三一)はもと仙台藩の儒者大槻盤溪の次男で保守的な学者。  
 ここにいう大槻の論は、一八九九(明治三二)年七月二十日の「日本」紙に掲載された「寄書」のなかの「国体上より洋教を不適當とする意見」をさす。なお「日本」紙は、陸羯南が主筆を務めていた国粹主義的傾向の強かった新聞。

## 解

いわゆる社会改革における教育の重要性を論じた文章である。「有為の青年をして木曾山中棟梁の巨材たらしめずして滔々たる庭の作り木となりらしめんとす」は、前途豊かな青年の能力を充分にはぐくむことができないでいる我国の教育界の現状を批判している。この当時の教育界はまだ未完成な段階で、教科書すら学校、教師の主体性を以て選定できない状態であった。

## 基督に対するペテロの告白

柏木義円

ペテロが基督に対して其心情を吐露致します毎に基督は之に対して御許しなさる所があり升した。私共之を味ひますれば大に学ぶ可き所が

ござい升。

先づ路加伝五章の四節以下の所であり升。ペテロは獲物の沢山なるに喜び浮かれ、主よ、何卒此後もコンナに沢山の漁のある様に為し玉へと基督を利用して漁の神とする様な不敬な考は露程も起しませんでした。反て心の真底から深く打たれた様に惶懼戦慄の念に堪へず、イエスの足下に俯して、主よ我を離り玉へ、我は罪人なり。御前に堪へずと申し升た。実に誠実極り升。敬虔の念に充ちて居ります。兎もすると信者は土地でも中以上の人に概して心も高く信用ある人々なれば斯る仲間に入り居れば面も栄へありなど云ふ交際上の考や信者は深切なれば其仲間に入り居れば何かの助けになるならんなど云ふ風の考や病気の時や国難の時に病を癒し貧乏を助て貰いたいの考や社会を改良する方便の為と云ふ考や種々コンナ考にてイエスに来るものがあり升が都て右様な考は基督が、爾曹の我を尋るは休徴を見し故に非ず、只『パン』を食して飽きたるが故なりと仰せらたる如く神を利用するものにて僭上の罪、不敬の咎めを免れません。人と交るでさへも斯ふ云ふ風にあの人と交り居れば斯く々々の益ありなど利害を打算して交際するはこれ人を牛馬や諸道具の如く見做すものにて人を人と見たる仕方ではありません。決して斯る利害の考を以て神を信するは神を人より以下の道具の様に見做すものにて大なる罪であり升。ペテロは露程も斯る横着なる考を起さず基督を見て惶懼戦慄に堪へざるの思を為せしは実に誠実の至り、敬虔の極みであり升。其れ故耶蘇は懼る、勿れ、爾今より人を穫可し、と御許しなされました。十四の馬を河辺に導くは易きも一匹の馬に水を飲ましむるは難しと申す諺があります。匹夫匹婦でも其人を神の国に穫るは容易き事ではありません。只ペテロの此敬虔の心こそ人を神の国に穫る唯一の力でありました。神の前に罪を惶懼する心には学問も富も権勢も何でもありません。匹夫匹婦でもペテロの此心を有すれば世に時めくものも之を畏敬せざるを得ません。基督がペテロの此心を見て人を穫可しと御許しになりましたは誠に味ある所であり升。



次に馬太伝十六章十六節以下の記事であり升。ユダヤの人民は只管国家的救済主を待ち望み、基督を以て羅馬の羈靴より猶太を救ふメシアと信じて居る事でありますれば基督一たび彼等に推されて足を挙げ玉は、幾万の人立りに饗応したる事でありませう。然るに基督は此等の大衆の上に其王国を打立つる事を肯し玉はず、ペテロが、爾はキリスト活神の子なりと告白致しますやうは血肉爾に示せるに非ず、天に在す吾父なりと称賛なされ、我教会を此磐の上に建つ可しと御許しになりました。即ち基督の教会は時勢に応和し、或は国家主義に和し、或は国粹主義に応じ多数の人心に投合して其同賛を得其上に教会を建つると云ふ様なものではなく実に一人にても二人にても基督を活ける神の子なりと信じ最上の敬と愛と全き信任とを払ふ信仰の上に其教会を建て玉ふのであり升。何の教でも世の人を善に導きさへすれば可なり、基督教の文明国の教にて内地雑居後社会改良の為に必要なる可れば我儕も其教に入り社会の風教の為に尽くす可しなと恰も俱樂部や協会に入るが如き心地にて来る人が如何に多くあるとも此等によつて教会を建つるは基督の御意ではありません。又決して斯る教会は堅固にして永遠に発達する活力ある教会でありません。基督は活ける神の子なりとの信仰コレこそ教会の地盤であり升。此信仰ある人は教会の礎石であり升。

次に約翰二十一章十五節以下に三度迄、爾我を愛するかと御尋ねなされ、愛するとの答を得る毎に我を愛するならば我羊を牧へと仰せらるゝものにて其他の動機にては牧会は出来ぬとの意味と存し升。

最後に路加伝廿二章三十一節以下を御覧なさい。ペテロは、主よ我は獄に迄も死に迄も爾と共に往かんと心を定めたりとの決然たる勇壮なる硬語を吐きました。併し裏にペテロが、主よ我を離れ玉へ。我は罪人にて主の前に在るに堪へずとて惶懼せし時は爾、今より人を獲可しと御許るしなされましたなれども、今度此壯語に対しては反て今日鶏鳴かざる前に、爾三次我を識らずと言はんとて御仰なされました。実に人の決心は弱きもので、私の友人に意志極めて強き硬骨男子があり

まして私は今も其人に敬服して居りますが、此人が嘗て期する所ありて伝道界にありました頃、当時新神学の議論盛にして信仰動搖の時なるに、他の一友が此人を訪問し其所信を尋ねました。所が其人は毅然としてまかり間違へば此道に殉ずる迄なりと答へられましとて一友は大に喜で私に其事を報じました。併し私は其人の答は純然たる人の意志に由る様なれば如何ならんかと存じて居りました。然るに果して其人は其後伝道界を去りました。基督がペテロに許し玉へし所と許し玉はざりし所とを比較して味へますれば余程味ある教訓があると存じます。

#### 解

この文章は分かりやすく、礼拝説教の原稿かと推測される。イエスとペテロとの関係を①ルカによる福音書五章四節以下、②マタイによる福音書一六章一六節以下、③ヨハネによる福音書二二章一五節以下、および④ルカによる福音書二二章三十一節以下のテキストによって解き明かしている。①はイエスが誠実なペテロを諒としたこと、②ではイエスを、生ける神の子、メシアと呼んだペテロをイエスは信頼し、この岩（ペテロはイエスが語っていたアラム語で「岩」を意味する語「ケファ」とも呼ばれていた）の上に教会を建てると言ひ篤い信頼を寄せていたこと、③はペテロがイエスを愛していた、その愛の上にこそ教会を建てるべき、と言ったこと、そして④では大言壮語したペテロが結局イエスを拒否したことを、柏木の嘗ての友人に寄せて述べている。イエスとペテロとの相克の場面を福音書から四か所を選んで説いたのは、要するに「基督がペテロに許し玉へし所と許し玉はざりし所」を玩味せよ、ということと導くためであつたと思われる。この文章中、「惶懼」ないし「惶懼戦慄」の語を数回も用いて右の趣旨について述べたのは、教会というものは、世間的な利益、時勢、国家主義、そして国粹主義のためではなく、ただ神への畏れを以て信仰のためにのみ建てられるのだということ強調するところに

あつた。この文章から、当時、背景にあつたであろう教会をめぐる種々の働きかけが想像される。

○第十二号（明治三十二年十月十五日）

婦人問題  
 婦人兼印刷人 大久保真次郎

別項の社会道德の統計なる条下を見よ。明治三十年の統計に由れば同年我国結婚の数は三十六万五千二百七にして離婚の数は十二万四千七十なり。即ち結婚百に対する離婚三十四の割合にて欧米諸國中離婚の最も多き丁抹<sup>1</sup>すら結婚一万に対する離婚四百九十六、即ち四分九厘にて我国の九分の一に過ぎず。英国の如きは結婚一万に対する離婚、僅かに十九にて之を我国に比すれば二百分の一に過ぎずと。離婚の如く夥しきは畢竟夫婦の觀念が正しからず、結婚の濫用せらるゝを示すものにて即ち是れ社会の礎基たる家庭の腐敗を發表するものに非るか。実に文明社会の大恥辱と謂ざるを得ず。然るに今日の社会は恬として之を怪しまず、幾度びか妻を更へて敢て之を羞恥とせず。離婚の比例逐年増加するの傾向あるは誠に国家の深憂と謂ふ可し。

然れども我国旧来の道德は離婚を是認するものなり。維新以前我国婦人のバイブルとも云ふ可き女大学には女に七去とて悪しき事七ツありとて子なき女は去る、悪疾あれば去る、善く舅姑に事へざれば去る、淫乱なれば去る、嫉妬深ければ去る、盗心あれば去るとの七条目を掲げたり。而して今日の教育界は過度に忠君愛国の形式に重きを置き屢々些細なることより不敬事件なるものを起したりと雖ども、果して如何程迄厳正なる家庭の倫理を説て以て家庭腐敗の根原たる旧思想を矯正するを勉めたるか。吾人は時事国民毎日等の諸新聞が近頃大に家庭に於ける旧思想を排斥するに勉むるを見ると雖ども反て所謂教育家が此題目に關して寂然唾の如くなるは我国の教育は未だ社会道德根本たる家庭の倫理を正すに足らざるなり。去れば我国の現社会は旧日本の教学を後援として離婚を是認し、蓄妾を是認するの蛮風尚ほ滔々と

して現存するものと知る可し。

厳正なる一夫一婦觀念を憶き苟も偕老同穴を誓ふたる以上は苦楽榮辱終生之を共にし姦淫の故ならでは何物も夫婦の關係を絶つ理由たらずと信ずるものに在ては今の社会に女子を有するは実に傷心の事と謂ざるを得ず。同信の家に嫁せしめんと欲するも同信の家尚ほ多からず、止むを得ずして未信者の家に嫁せしむれば往々離婚の事あり。斯る蛮風は一日も早く破壊して健全清潔なる家庭を基礎とせる新社会を打立てざる可らざるなり。

去る七月中大槻如電なる人は『国体上より洋教を不適當とする意見』と題して日本紙上に左の如き意見を示したり。

大日本帝国の世界万国に卓絶して他に比類なき国体は皇統一系にして万世なるに有り……。さるからに国民にして金甌の欠けんことを憂へざるは国賊と言ふべし。臣子として血統の絶へん事を省みざるは乱臣と言ふ可し……。

然るに余が耶蘇教を国体の上より民俗の上より不適當とする所由は彼が天理として設ける一夫一婦の教本にぞあんなる。若し洋教を信ずる者にして其天理を崇奉し果して之を我国に実行せんと欲せば知らず識らずの間に国賊乱臣の中に陥らんの恐ある可し。

是れ幾多の保守家が言はんと欲して流石に文明の旭日既に三竿に上りたるの今日うら差しくして言い出でざる所を能くも思ひ切りて言ひ放ちたるものと謂ふ可し。然れども一夫多妻は是れ蛮風の名残なり、固とより社会進化の或る階段には一夫多妻を必要とするの社会もある可しと雖ども要するに一夫多妻を必要とするの社会ハ進化の尚ほ劣等なる社会なり。果して所謂我国の国体なるものは斯る非倫理なる醜陋なる蛮風に由らざれば維持する能はざるの国体なるか、果して然らば我国の国体は世界に対して恥づ可く文明と両立する能はざるの国体にして之を維持せんが為には開国の国是を破壊し国運を鎖国の旧態に引き戻さざるを得ざるなり。此の如き国体が我国体ならば之を破壊するに何かあらん。吾人は我国体が此の如きものなりとは容易に信ずること

能はざるなり。我国の保守家が動もれば国体を傷くるとか不敬とか云ふ鬼面を被て敢て没倫理非文明の陋態を維持せんと試むるは反て是れ我国光を辱しむる所以にして其愚や実に憐れむ可きなり。要するに能く人間を其奴隸として臂の指を使ふが如く使役するの強烈なる勢力ある獸欲が斯る国体論や旧日本の教学や慣習やを後援として現社会に横行することとなれば婦人問題の前途実に多事なりと謂ざる可らず。利の在るところ蟻の甘きに就くが如く存娼問題は年々に起りて以て社会を攪き擾さん宛も後の蠅の如く隨て追へば亦隨て集らん。到底社会の思想を教育して根柢より治癒せざる可らず。上毛婦人大会、婦人矯風会の開期近し、敢て一読して諸賢姉の注意を促す。

## 註

(1) デンマークのこと。

(2) 第一一号の「社会改革に於ける基督教会の地位」の註3に同じ。

## 解

いわゆる国体論に対する柏木の反対論として、これほど直截的なものはないであろう。巧妙にも国体論自体に対しての反論であったり、否定論であるのではなく、直接には「婦人問題」として大槻如電の論に対する反論という形でなされているので、国家自体や国権家などを相手にしているわけではない。しかし、柏木の論は国体論の本質の一端を見事に突いている。大槻の論は、典型的なキリスト教排斥論の一環であり、「婦人問題」の「一夫一婦」の否定論はその倫理的側面において、柏木によって容易に論破されている。

○第十三号（明治三十二年十一月十五日）

無教の国、無教の家、無教の人

發行人兼印刷人 大久保真次郎

飽食暖衣逸居して教なき時は禽獸に近しと無教の国は或る意味に於て禽獸の国なり。既に禽獸の国たり。其廉恥なく義気なく唯利を逐ふて狂奔する固自然の結果なり。蓋し国家の深憂は其国民の思想感情を嚮導一統して其社会良心を明にするの権威ある教なき程大なるはなきなり。見よ、政府を監督し国政を正すの特権を有する最要機関たる議会在が反て私党の利を網するの市場となり、其神聖なる投票権は忌しき売品となりて高く売られんことを待ち、政府之を買ひ、会社之を買ひ、富豪之を買ふと云ふが如き咄々怪事の行はるゝ国ありとせば、これ果して何に由るか。議会を作るものは国民なり。其国民にして此の如く劣等醜陋なる議会の外作ること能はずとせば其国民の腐敗亦知るべきのみ。此の如き国の学士、博士は其尊貴なる専門の学識を売りにて其説を二三にするなり。此の如き国の会社は徒らに投機的僥倖を希ふて其経済界を攪擾して国利民福に益なきを思はざるなり。此の如き現象の頻りに現われ来るも社会良心は既に麻痺したるか。真面目に之を憂へ慨然として起て之を正さず、徒らに君子国と称し、金甌無欠の国なりと称す。嗚呼これ果して何に由るか。他なし。其社会の良心を照らして之を醒覚するの権威ある教なきに由るなり。無教の禍患の国家に於けるは猶ほ肺患の人身に於けるが如し。其発する遅くして其患や大且つ深し。或は恐る、其遂に治す可らざるに至らんことを其人心の強健にして社会良心の明なる其品格の堅実にして世界の大国民たるの氣象ある宇内英国民を以て最とす。而して英国社会は最も宗教の樹立に心を用ゆる国なることは後の倫敦にて有力なる二大新聞「デーリーテレグラフ」「デーリーメール」が日曜刊行を為さんとするに当り輿論は翕然起て之に反対し、遂に二新聞をして日曜日を守らしむるに至りたるにて明かなり。其他米の如き、独の如き、何も其国民の思想感情を一統し嚮導す可き宗教の独立に重きを置かざるなし。英米の社会に

在ては聖書は即ち国民の書なり。家庭の書なり、智慧貧富男女老幼の別なく均しく尊重して其心の師とする所の經典なり。我國の如きも維新以前に在ては其社会の心髓たりし士人は決して無教の徒にては非りしなり。儒教は即ち彼等に対しては權威ある教にして經書は即ち彼等の家庭のバイブルたりしなり。然れども維新の革命は啻に政治上の革命のみに非ずして亦思想上の革命なりしなり。幕府と三百諸侯が其權威を失ふたると同時に士人の心を嚮導したる儒教其權威を失ふたり。爾來未だ我國民の向上心を鼓舞養成すべき權威ある教なきなり。今日の仏教社会の如きは通常の社会よりも遙かに腐敗して其思想行動の陋劣卑屈にして而も頑冥なる、啻に社会の道德を腐敗せしむるのみならず亦社会の改進を妨ぐるものたり。我国人士に真実を重ざる真面目なく、愚夫愚婦には迷信亦可なりと謂ふが如き不親切なる考を抱くもの滔々皆是れなるを以て仏教の如き幸に存在を保つを得るのみ。苟も我國家の爲め國民の良心をあきらかにす可き權威ある教を確立せんと欲するの誠意ある人士起らば今日の仏教社会の如き先づ断じて排滅せざる可らず。如何ぞ此の如き教を以て我國民の教と爲す可けんや。然らば我國民の崇奉す可き教は何ぞ。是れ國家緊急の問題なるなり。

伝道の書に曰く

我は日の下に我勞して諸の動作を爲したるを恨む、其は我の後を嗣ぐ人に之を遺さざるを得ざればなり。其人の智慧は誰か之を知らん。然るに其人日の下に我勞して為し智慧をこめて爲したる諸の工作を管理るに至らん。是れ亦空なり……今茲に人あり、智慧と智慧と才能とをもて勞して事を爲さんに終には之が爲に勞せざる人に一切を遺して其所有と爲さしめざるを得ざるなり。是れ亦空にして大に悪し。

人をして怠惰にして遊蕩を恣にせしめんが爲に齷齪として其資を積むものあらば人誰か其愚に呆れざらんや。然れども世の滔々子孫の爲に財を積む事のみ汲々たるものは概ね實際に此流亜なるに非ずや。徒らに百万の資を積んで座食に使ふ便ならしめ而して其精神の教養を欠

く。是れ其子孫をして遊食怠惰ならざるを得ざらしむるなり。放蕩淫逸ならざるを得ざらしむるなり。徒らに子孫の爲に財を積むを知て子孫を教育するの任を果さざるの父母は直接には怠惰者の爲に遊蕩の資を積むの愚を爲すものなるのみならず、又間接には其子孫を誤り社会の風記を紊乱するの罪を起すものなり。一方には他人の労働に寄食して怠惰坐食一事の爲に所なく奢侈淫逸是れ極むるの富豪あれば他方には粒々辛苦僅に其生を保ち一日働かざれば即ち飢饉に斃れんとするものあり。遊惰なるもの衣食に余りありて労働するもの反て餓寒を凌ぐ能はず、是れ近世社会問題の生起する所以に非ずや。彼の社会主義の学者をして「富貴にして怠るものは盜賊なり、貧賤にして怠るものは乞丐なり」と云ひ「人の此世に生る、均しく赤裸にして一の有てる所なし、然るに他人の死亡てふ偶然の出来事に依て一朝巨富を僥倖す、是れ豈不公平の制度に非ずや」と叫び、遺産制度は坐して他人の労働を盗用せしむる所以なりとて痛く遺産制度に反対せしむる所以のもの亦富を作くり富を相続するもの、不心得に由ること少なしとせざるなり。然らば大に子孫に産を遺さんと欲するものは亦大に其子孫を教育して徒らに他人の労力の結果を「盜奪」するものとならざる様せざる可らず。道德なきの教育は有識の奸賊を養成するものなりとの格言もあれば最も心を用ひざる可らざるものは子孫の徳性を養成することにとぞあんなる。去らば其家の崇奉して以て子孫の徳性を陶成する教は何ぞ。其家の憲章とも爲す道德上の權威ある經典は何ぞ。是れ家庭に於ける最要の問題に非ずや。

朝に道を聞て夕に死するとも可なりと斯く迄尊重する教を有し其奉する教を以て最も優れたる我産と爲し之を以て我心を照らし我行為を正し以て生涯須臾も離る可らざる道と爲す。斯る人こそ真に教を有するの人と云ふ可けれ。滔々たる世人、其問ふ所は先づ利害と損得となり果して真面目に崇奉する所の教を有するや如何。教なきの人は無主義無意味に茫乎として其の一生を送くるの人なり。吾人は敢て何人にも問はんと欲す、曰く「足下の奉ずる教は如何」と此問題に対する答案

は即ち其人物の真価を定むる所以なり。此問題は各人が是非其決答せざる可らざる至要至重の問題なるなり。

噫国に教なく、家に教なく、人に教なきは今日我国の現状に非ずか。教なきの国は腐敗せざるを得ず。教なきの家は紊乱せざるを得ず。教なきの人は墮落せざるを得ず。我国社会の現状は公私共墮落しつゝあるの徴候を示しつゝあるに非ずや。今日我国に於て最も重要にして最も急切なる問題は教を撰ぶより急なきなり。吾人不肖と雖も敢て自ら揣らず篇を重ねて此問題に就て論述し、聊か大方の参考に供する所あらんと欲するなり。

### 註

(1) 経典を「けいてん」を読む場合、これは儒教の語彙である。このすぐあとに「儒教は即ち彼等に対しては權威ある教にして経書は即ち彼等の家庭のバイブルたりしなり。」と述べ、さらに、「儒教其權威を失ふたり」とはいうものの、実際柏木においては儒教の〈思想〉は力強く生きていた。

(2) 旧約聖書「コヘレトの言葉」二章一八〜二一節。

### 解

この論のコンセプト自体、きわめて儒教的な傾向をもっている。もちろん、「維新以前」の「士人」が社会の「心髄」であった時代のことであると言っているので、儒教が今の時代において肯定的な文脈で意味をもっているというのではないが、「経典」をあえて「けいてん」と読ませたりしているところなどもあるからである。さらに、題目に「無教の国、無教の家、無教の人」と、国・家・人と並べていて、<sup>けいせん</sup>経典「大学」にいう「修身齊家治国平天下」の秩序そのものを踏まえられている。柏木の論点は、今の時代においてこそ、国・家そして人にとって価値のある「教」というものがある、安息日である日曜日には新聞さえ刊行を休むという宗教倫理に基づく慣習を打ち立てた英国の

ごとく、日本もそうした倫理を構築しなければ国中が腐敗してしまう、という危機感を喚起している。もちろん、その倫理の基礎たるものはキリスト教であった。

